

オホ

年十一月を以て文學訓導に任ぜられてから後、諸學校に教鞭を執り、二十年九月第四高等中學校の興るに及び、その教務を屬託せられたが、少時にして罷めた。直温性温厚篤實詩文はその得意とする所でなかつたが、尤も育英の業に長じてゐた。後東京に上り、二十九年正月歿した。

オホタ 大田 羽咋郡押水大海庄に屬する部落。

オホタ 太田 能美郡白峰(舊牛首)の内の小字。

オホタ 太田 河北郡井上庄に屬する部落。三宮古記近年水引神人沙汰進分事條に、『大田ヨリ北賀茂マデ』など、見える。又白山宮莊嚴講中記録享祿四年の條に、『同年十月ニ越前能登越中三ヶ國武士亂入。能登越中衆、陣大田云々。』ともある。

オホタ 太田 羽咋郡白知院内太田富水保にある部落。明應八年十二月廿四日山義元在判一宮衆徒出高等目録に、『三百前在太田富永せんふ山と號須磨分。』とある太田富永もこの太田のことである。明治中に至つて東太田・太田に分ち、次いで東太田・西太田とし、更に合併して太田とした。

オホタ 太田 鹿島郡萬行保に屬する部落。

オホタカゲンテツ 大高元哲 諱は原性。江戸住の醫師。東榮の子。文化十一年父の遺知二百五十石を受け、文政五年百石を加へられ、天保九年歿した。子東榮亦その遺知を襲いだ。

オホタカツヒロ 大田一寛 通稱彌左衛門。寶永四年五月御歩に任じ、御書物役對御御用を命ぜられ、五十俵を給はり、正徳三年父に

代り與力として百石を受け、對馬役留の如く、年三十石を加へ、御文庫御用を勤め、組外・享保五定番御馬廻江戸御廣式御用に厩任し、寶曆五年七十七歳を以て歿。子孫相續いて藩に仕へた。

オホタカトウエイ 大高東榮 諱は厚胤。初め育次郎。江戸住の醫師。父東竹の歿した時幼にして十人扶持を給せられ、天明六年又十人扶持を加へ、寛政四年新知二百石を賜ひ、文化六年更に五十石を増し、十一年歿した。

オホタカトウケン 大高東元 江戸に住する醫師で、正徳五年六月召出され、俸三十人扶持を賜ひ、元文二年八月新知二百石を受け、延享四年六十歳を以て歿した。

オホタカトウチク 大高東竹 後に保業と改めた。江戸住の醫師で、延享四年父東元の歿後その遺知を襲ぎ、寶曆九年歿した。

オホタカハ 太田川 鳳至郡吉谷嶺山から發し、古君嶺で海に注ぐ。流程三軒三許。

オホタガハ 太田川 鳳至郡諸橋郷に屬する部落。明治八年十月に至り、竹原と合併して竹太と改稱した。

オホタガハ 太田川 鳳至郡竹太の内の小字。

オホタカンサイ 大田蘭齋 通稱於菟八郎。榮太郎の子で、元貞の長孫である。幼より業を元貞に受け、元貞の歿するに及び、叔父晴軒に就いて學んだ。父の後を嗣ぎ、加賀藩に仕へて、祿二百石を食み、安政四年四月十四日病んで歿した。年四十二。簡齋性極めて詩を好み、著す所簡齋詩集數卷がある。

オホタキ 大瀧 能美郡新保地内で、部落

から西南八軒の大日山麓に在る瀑布。高さ九〇米。

オホタキ 大瀧 ↓オホタキハタケナカ 大瀧島中。

オホタキ 大瀧 羽咋郡日用の内の小字。

オホタキガハ 大瀧川 鹿島郡別所領しぶち谷及びあま池から流出し、河内領で熊木川に落合ふ。流程四軒許。

オホタキハタケナカ 大瀧島中 鳳至郡七浦庄に屬する部落。大瀧と島中とは二ヶ所にあつて、古くは別の村であつたが、後に合併して大瀧島中と稱した。明治中更に改めて大瀧といふことになつた。

オホタキヤマ 大瀧山 河北郡曲子原の北方の山。高さ一七五米。山體第三紀層。

オホタケ 大竹 石川郡山島郷に屬する部落。

オホタジヨウ 太田城 河北郡太田に在つた。三州事蹟誌に、この村嶺山に古城跡があつて、太田和泉守が居たとある。この太田和泉を越登賀三州志には織田信長の臣とするが、それではあるまい。

オホタシン 大田新 鹿島郡萬行保に屬する部落。藩政時代にはまだ大田から獨立してゐなかつた。

オホタソウコ 太田宗古 信長記の著者太田和泉守牛一の通稱は又助であつた。其の子に又助・又七二人がある。又助の子右衛門佐、千石を以て豊臣秀頼に仕へた。右衛門佐の弟は初名を立年といふ醫師であつたが、承應元年九月前田利常に小松に召出されて、御書物奉行となり、名を宗古と改めた。

オホタタアキラ 大田忠明 通稱彌兵衛。

安永五年新番となり、天明四年父三郎兵衛一平の遺知百三十石を襲ぎ、組外に列し、御勝手御用より諸職を經、寛政二年七月五十石を加へ、同年九月廿三日四十五歳を以て歿した。

オホタチノ 大館野 石川郡中興郷末松地内の曠野方一八〇米許りの地を大館野といひ、足利氏の末世大館氏の采地であつたといふ。藤原日録寛正六年六月十八日の條に、『大館又四郎殿被掠烈州武松村之事依岩室契約也。无謂之由披露之。仍御領掌也。赤松次郎法師被官浦上美作守以訴狀申之。』とあるが、加賀に武松村はない。恐くは末松の誤であらう。

オホタドウケン 太田道兼 諱は頼資、號は文齋齋又は如松軒。初め金澤城中作事所の園吏であつた爲、能登・越中を巡つたことが多く、遂に能登名跡志を著した。性文雅風流、俳諧を好み、後醫となつて輪島に移住し、文化四年五月歿。その他の著に吉野郷領十景紀行もある。道兼はその通稱なるべく、これを世本道謙に作るものは誤である。

オホタトミナガ 太田富永 ↓オホタ太田(羽咋)。

オホタトミナガハ 大田富永保 羽咋郡に在つた。承久三年注進の能登國田數目録に、『大田富永保、三町九段三、元久元年立券狀。』と見える。後世亦太田富永保の名を存する。

オホタトミナガハ 太田富永保 羽咋郡に屬する。詳しくは白知院内太田富永保といひ、藩政時代では二口石野町・三・屋・太田の四ヶ村を含んだ。

オホタナガトモ 太田長知 初名富隆次。